

いぢきとてうけらふも然るの中

人のこゝろはれきふやありけり

小町盛衰抄

歴史散歩私記

田辺聖子

文藝春秋

定価 九八〇円

小町盛衰抄

《歴史散歩私記》

昭和五十年五月三十日 第一刷
昭和五十三年七月二十日 第三刷

著者 田 辺 聖 子

発行者 檜 原 雅 春
発行所 株式会社 文 藝 春 秋

(102) 東京都千代田区紀尾井町三

電話(〇三)二六五—二二一

本文印刷 凸版印刷
製 本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替え致します

連作小説

小町盛衰抄

《歴史散歩私記》

目次

夜明けの神々《スサノオ》

5

女王卑弥呼《卑弥呼》

31

女帝行幸《持統天皇》

55

小町盛衰抄《小野小町》

75

石山寺の月《紫式部》

99

後白河院抄《後白河院》

125

淀君と北政所《淀君》《北政所》

149

難波すずめ栄華の世盛り《西鶴》

173

詩人の死《芭蕉》《蕪村》《一茶》

199

歌麿とその女《歌麿》

231

一葉の恋《樋口一葉》

255

絵本・春団治《桂春団治》

279

あとがき

305

連作小説

小町盛衰抄

《歴史散歩私記》

A・D 坂田 政則
写真 藤木 鉄三
題字 原・アートアクチュアル

夜明
けの
神々

私は、日本神話の中では、スサノオという男神がいちばん好きである。

また、この神だけは、はじめから終りまで、性格がちゃんと筋を通して思うように思われる。学者の研究によると、スサノオ(『古事記』では建速須佐之男命、『日本書紀』では素戔嗚尊という字が当てられている)は、暴風や地震や噴火・海嘯などを神格化したものだそうである。荒れすさぶ、という意味の名前なのだろう。私が、カタカナで書くゆえんである。

なぜ好きかというと、乱暴なわりに、この男神は、わるげがなくて、にくめない気もする。そもそもスサノオの父はイザナギ、母はイザナミである。この両親は日本創造の神々で、仲よく国や神々を生みつけていった。ところが、火の神を生んだがために母のイザナミは焼け死んでしまった。

相愛の妻に死に別れたイザナギは泣く泣く、死者の国まで妻を捜しにいった。

ところが、美しい愛妻はすでに腐敗糜爛して、《蛆たかれころきて》横たわっていたので、イザナギは恐れ、嫌悪を感じて逃げかえってしまった。身の汚れをはらいきよめようと、九州の日向の国の橘の瀬戸のアハキ原で禊をした。

そのときに、たくさんの神々がうまれたのだが、最後に、左の眼を洗ったときに生れたのが、太陽の女神、アマテラス大御神である。右の眼を洗ったときに生れたのは、月の男神、ツクヨミの命である。

鼻を洗ったときに生れたのは、嵐の男神、スサノオの命である。

この、鼻というのも、私には面白い。眼を洗って《成りませる神》というのは、いかにもさわやかで気高い感を与える。しかし、鼻を洗って出来た神というのは、何だかユーモラスである。しかも、嵐の神が出来たというのだから、烈しく手漣でもかんだがごとき感じを抱かせる。そうでなくて慎重に鼻を洗ったとしても、私には何やら、昔の古い雑誌で見た広告の「ミナト式」鼻の洗滌法を思わせ、どっちにしても、スサノオの出生は、いささか姉兄に対して、格が落ちる印象を与えずにはいない。

おそらく、スサノオ自身も、そのことでコンプレックスを抱いていたようにうけとれる。

左右の眼から日月の神々が生れ、鼻から自分が生れたというひけめで、スサノオは幼いときから、ゆえ知らぬ不平不満をじっと抱えこんでいたにちがいない。かつ、父神ならびに人々は、日月の神を尊び、嵐の神を恐怖し禁忌する。避けるようにする。だからスサノオはますます、腹が立って乱暴をくり返す、不良息子になった。

酔っぱらって見さかいなく物を叩きこわす、けんかをふっかける、女の子に乱暴をはたらく、困り者であつたにちがいない。

しかしスサノオの心中は、さびしいのである。なぜオレだけが特別扱いに、軽んじられねばならぬのだ。なぜオレのことを、父上は、姉貴や兄貴のように可愛がつくれぬのだ。どうしてオレだけまます扱いなのだ。

しかしそんなことを口に出して甘ったれるわけにはいかない。スサノオもスサノオなりのプライドがあるわけである。

姉のアマテラスだけは、弟のそんな心を知っている。かしこくてやさしい彼女は、弟の性質の中に一点、純粹で気のいい、弱気な部分があるのを見ぬいているのである。スサノオにやさしくするのは、彼女ひとりである。

ところで父神のイザナギは、たくさんの神々を生んだはてに、やっと氣に入つた貴い神が生れたとよろこんで、アマテラスたちに後事を託することにした。創業の全責任を果たしたので隠居したくなったのだ。

アマテラスには高天原たかまのはらを統治させることにした。これは神々の上に君臨する最高神の地位を与えることである。ツクヨミには、

「夜の国を治めよ」

と任せ、またスサノオには、

「おまえは、海原うみはらを治めよ」

と命じた。

アマテラスは天上界へ、ツクヨミは夜の国へ、それぞれ父神の仰せのままに出立していった。しかしスサノオはふてくされて、いつまでたつても出発しない。いつも自分が割のわるい分を引つかぶる気がして、ひがんでいる。そして、鬚ひげをふるわせて大泣きに泣いたり、あばれたりした。嵐の神がありつたけの力で咆哮ほうこうするものだから、山々は枯れ、火山は火と灰をふらし、海は乾ひ上がり、秩序も調和も失われ、地上はめっちゃめっちゃになった。

父神は腹を立ててスサノオをよんだ。

「どうしてこんなことをするのか。なぜ、いつけた領国へ出発しないのだ」

スサノオは、父神の言葉に返事しない。もはや親子の対話は失われ断絶しているのである。父神にすればなぜこの末息子が昔から理由なき反抗を重ねるのか、とんと解げせぬのである。可愛げのない奴だと思う。

「おい、どうしたのだ」

と重ねて叱ると、青年は不敵に笑って、

「母上のゆかれた死者の国ならいきますよ。父上はそこから逃げ還られたそうですが」

というので、父神はあまりにひねくれた奴であると怒り心頭に発し、

「それなら、ここに住むな。とっと出ていけ！」

と勘当かんどうしてしまった。

「いわれなくとも出ていくぞ。誰がいるか、こんなところ！」

と、親子げんかでよく聞かれる文句をやりとりしたあげく、スサノオは飛び出したにちがいない。

だがスサノオにはどこへいくというあてはない。郷里や身内の間でこそ、威張って乱行を重ねていても、世間はそう甘いものではなく、スサノオは身の置き所に困った。こうなると頼れるのは、やさしかった姉のアマテラスのみである。彼女なら世論に挫けず、人々の非難や弾劾から、ひとと弟を守ってくれるにちがいない。

いつの世も、弟は、やさしい姉に甘ったれるもので、スサノオは天界へ赴く。しかし追放されて頼ってきまして、本当のことをいうのは体裁わるい。スサノオは頭のわるいくせに見栄っぱりなのである。虚勢を張ってわざと手荒に、どしんどしんと、天上国の高天原を訪れた。『古事記』には《山川ことごとくに動み、国土みな震りき》とある。

しかし、そうやって乱暴にやってきたスサノオの心の中は、実をいうと、心細さ、さびしさ、不安、絶望でいっぱいなのである。アマテラスのやさしさに甘え、彼女のやわらかいふくよかなひびに顔をうずめて泣きたい思いなのである。しかしスサノオの性格としては素直に「お姉さん」と呼んで、幼子のようにまつわりつくわけにはいかない。眼を三角にして鬚をひねり、歯をくいしばり、十拳の太刀をにぎりしめ、《国土みな震》らしてやってくるのである。どうも困った性格である。

アマテラスは大いに驚いた。スサノオの気心はわかつているつもりでも、もともと、頭もあんまりよくなく、バカ力のある男だから、何か誤解でもすると、どんな所業を働くか見当もつかな

い。ひょっとしたら、この国がほしくて奪いに來たのではないか。そう思ったので、毅然とした態度で迎え、

「どういうわけで、上ってきたのです」と詰った。

スサノオが見ると、姉はりりしく男装して武器までたずさえ、返答によっては容赦せぬという心がまえをみせている。そうしていつも美しい姉の面立ちが、上気と緊張でいっそうひきしまつて美しい。頬はさえざえしたあけぼの色に染まり、黒眼は挑むようにきらきらと輝いている。スサノオは美しい姉に叱られたと思って、いっぺんに、しゅんとなつてしまい、オドオドと答えた。「私は、悪心など持ってませんよ。父上に追放されたので、地上の国を出てゆくもんで、姉上にいとまごいに來ただけです」

姉は、ほんとう？ という顔で、

「じゃ、何でその言葉のあかしとするの？」

「誓いますよ。そのしるしに、神を生んでみせます」

そこでアマテラスも神々を生んだが、姉のほうには男神たち、弟のほうには、女神たちができた。アマテラスは、弟を警戒して、ただけしい心もちでいたので、男神が生れ、スサノオは、姉に対してびくびくして気弱な心でいたので、女神が生れたにちがいない。

「そうれ、ごらんさい。私になんの異心も野心もない、というしるしですよ」とスサノオは得意げにいった。

「ほんとうね」

アマテラスはたとえいつときでも弟を疑ったり警戒したりしたのを悔いた。弟が元来、甘えん坊で、彼女に甘えに來たのも見ぬくことができた。そして、弟にいかめしく詰問した自分を恥じ、弟を可哀そうに思わずにはいられない。

「ごめんなさい、私が思いちがいでいたのかもしれないわ。ゆっくりしていच्छゃい、いつでも」

姉にやさしくいわれて、スサノオはもう有頂天である。こういう人間は、そういわれると、ただちに、つけあがるものである。

高天原においてまたぞろ、スサノオの乱暴がはじまった。アマテラスの作っている田の畦あぜをこわしたり、田に水を引く溝みぞを埋めたり、面白がって、よくないいたずらばかりする。

神聖な神殿に大便をしちらして、人のおどろきわぐのを見て哄笑する。

高天原は大恐慌である。しかしアマテラスをはばかりて、むきつけにスサノオを難ずるものがない。その上、甘い姉は、弁護までして、弟をかばう。

「スサノオは酔っぱらったんですよ。田の畦をこわしたり溝を埋めたりしたのは、土地が惜しいと思つてのことなのよ、きつと」

しかしスサノオの放蕩、乱行はますますエスカレートする。なにしろ、

「オレはアマテラスの弟だぞ！」

といえ、人々は恐れ入って何もいえないのが、面白くてしかたがないのだ。アマテラスが、

たくさん神々や人々に敬愛され、その余徳で、スサノオの悪業が見のがされているのだ、ということまで考えがまわらない。そこがスサノオの、少し足らぬところなのである。みんな、かげでは、

（大御神さまも悪い弟御をもたれて、なんとお気の毒なことだろう）

とひそひそ話をしているのだ。

スサノオはどうとう神聖な織物を織っていたアマテラスの御殿の棟に大穴をあけ、馬の生皮をはいで、そこから投げこんだ。はた織場には大ぜいの女たちが働いていたので、スサノオはおどかすつもりで、いたずらしたのだ。ところが女の一人がびっくりしたあまり、梭で、どをついて死んでしまい、上を下への大騒動になった。目前に見たアマテラスのショックはたいへんなものだった。

「あの子は、私の前ではいい子だと思っていたけれど、やはり、悪いことをしていたのだろうか」

彼女は衝撃で放心して、天の岩戸へかくれてしまった。とたんに、高天原に日のかがやきは消え失せ、地上の葦原の中つ国も一面、闇にとざされた。

悪神や悪霊は、このときとばかり、蠅のようにみちさわいで、草は枯れ、稲はみのらず、女たちは石女になり、家畜は病んだ。

もう、八百万の神々もほっておけない。「思いかねの神」というフレイントラストに企画を立てさせ、アマテラスを岩戸からともかく引出す算段をする。ニワトリを集め、鏡を作り、青々と